

成長期の下肢スポーツ障害

座長：山 下 敏 彦・鳥 居 俊

本 PD はスポーツ委員会企画として計画され、5 名の発表と総合討論を合わせて、合計 70 分で構成された。

平野篤先生(水戸協同病院)はオスグッド病について定義、発生メカニズム、画像診断、治療方針について解説された。重篤な障害と考えられていないものの、エリート選手養成途上で問題になり、特に MRI を用いた脛骨粗面発育段階の確認、病態や症状発生機転の把握を重視された。

亀山泰先生(スポーツ医・科学研究所)は膝離断性骨軟骨炎の基本知識、治療法選択について解説された。成長期には進行初期の離断が生じる前の段階で発見することで、安静やドリリングのような比較的簡便な治療で治癒させることが可能な点を強調された。

内山英司先生(関東労災病院)は疲労骨折について豊富な症例をもとに、16 歳に発生が多く、骨形成型、骨吸収型、骨硬化型に分類する考えを解説された。競技によって発生部位が異なるが、手術を要する 3 部位(舟状骨、第 5 中足骨、足関節内果)への注意を喚起された。

白仁田厚先生(九州労災病院)は足根骨癒合症について、手術例を中心に癒合形態による分類、症状発生機転、治療の方法と成績を報告された。低頻度の障害であるものの、鑑別診断として想定することが重要である。

渡邊耕太先生(札幌医大)は有痛性外脛骨について、発症時期、発症機転、治療に関する考え方を解説された。足部の機能低下を伴うことが多く、その改善がスポーツ復帰に重要な点を強調された。

総合討論ではあらためて各障害の疫学、リスク因子、安静やスポーツ中止の必要性、手術適応やタイミング、早期発見や予防のためにできることなどについて演者に可能なかぎりエビデンスに基づく回答を求めた。会場からも少数ではあったが質問があり、該当する演者が回答した。

今回の PD の対象となった障害は膝、下腿、足部の疼痛の原因として高頻度であったり、鑑別上念頭に置く必要があったりという点で重要であり、最新の考え方をまとめて拝聴することができ、非常に有意義であった。

(文責：鳥居 俊)